

織田信長、豊臣秀吉、徳川家康に仕えた戦国武将

一豊と掛川

その7

もっぱら京都で働いた千代

京都妙心寺大通院にある千代の肖像画



高知城に立つ千代の像

京で要人との折衝役に

掛川城主時代の一豊は、太閤秀吉や、秀吉の甥である関白秀次の側近として京都の山内邸での生活を主とし、掛川城の運営は実弟の康豊に任せていました。秀吉が大名を統制するため、大名の妻子を在京させ、家臣とその妻子を各城下に住まわせていたからです。一豊は京と掛川を繰り返し往復し、夫人は京にあって秀吉政権の要人との折衝にあたっていました。

文禄元年(1592)秀吉軍の征韓の折、出陣を免れた一豊は、関白秀次に付属して京の守りにつき、1,500人の軍兵で警備についています。また文禄3年(1594)の伏見城築城の際も、一豊は秀次に従い1,200人の軍役を出し、建築用材の調達、石垣普請などの工事に携わっています。

一豊失脚の危機

文禄4年(1595)秀次の行状が謀反と見なされ、失脚の危機が起こります。秀次は高野山で切腹を命ぜられ、妻妾子女もことごとく三条河



千代の遺品として伝わる羽織
(森町蓮華寺にて)

原で誅に付され、側近の木村常陸や熊谷大膳なども自決し、親しかった最上義光、伊達正宗も厳しくとがめられ、浅野幸長は能登へ一時流されます。この時一豊は、秀次の配下にあり、大きな危機であったと思われませんが、以外にも秀次支配の遠江領から8千石を加増され、大事に至ることはありませんでした。これらのことは、秀吉の正妻、北の政所と千代夫人との関係が親密であったことから、北の政所からの働きかけがあったと想像されます。

(一部引用、山内豊秋著「掛川から土佐へ」より)



文禄2年(1593)一豊から寺領を寄進されている森町蓮華寺

(監修：掛川市郷土研究会連絡協議会)